地球滅亡までの7日間

設楽 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地球滅亡までの7日間

【Nコード】
N9738D

【作者名】
設楽　優

【あらすじ】
ある日突然始まった、それ。なんとなく過ごしていた毎日にそれは、大きな変化をもたらした。刻々と迫り来る最後の日……

1日目

「それでは、後残り7日でこの隕石は地球に到達する。と言うことですか？」
「そうです。そしてこの隕石は大きさが地球の約6分の1もありまして――」

朝。
起きたてでぼうっとした私の耳に、そんなくだらない会話が耳に入った。

「おはよぉ……またその変な番組見てるの？」
「おはよう。朝食はそこに置いてあるわよ。
それと、変な番組なんていわないでよ。これ結構面白いのよ？」
「そうかなぁ？」

毎日のように、天変地異だ。大地震がもうすぐ起こる。だの言っている番組は変としか言いようがないと思う。
とりあえず、ダイニングテーブルに置いてある朝食を胃に詰める事に専念する。

しばらくしてもうすぐ食べ終わりそうな私に、
「咲っ、大変よ！　もうすぐ地球は滅亡するらしいわ」
ソファに沈めていた体をわざわざ捻って私の方を向いた母はそう言った。
「そうなんだ？　大変だね。」

私は適当に話を流しながら食器を片付ける。
そして、一度リビングを出て自室に向かい、鞄を取って戻ると、

「私、もう学校行くね！」

と、テレビに夢中の母親に一応声をかけておく。

「いってらっしゃい、気をつけてね」

という声に私はいつも通りの朝を感じた。

家であるマンションから出て、緩やかだけど長い坂を登ると、もう2年も通っている学校が見えてくる。
坂を上りきって学校の校門近くに着くと、多くの生徒が何かを夢中に話しているのが目に入った。
教室に向かう途中の廊下でも、何人かが塊になって話し込んでいるのがちらほらと目に入る。

「ねぇ、何かあったの？」

教室に着いた私は、自分の席の近くでやっぱりみんなと同じように話し込んでいる友達に事情を聞いてみた。

「えっ！　咲ってば知らないの？
今日の朝のニュースでずっとやってたじゃない」
「ごめん、今日の朝時間なくて見てないんだよね」
「もうっ、地球に隕石がぶつかるって話よ！」

「……それってあのインチキ番組の？」
「なに？　そのインチキ番組って。
　とにかく、世界中が知ってる話よ。すごい大きな隕石が地球に今、向かってるらしいのよ」
「へぇ、そうなんだ」
　みんなそういう話好きだよね。と返すと変な顔をされた。
「咲、隕石は向かってくるだけじゃないのよ？　地球にぶつかるかも知れないのよ」
「だって、ぶつかるかも知れない。でしょ？」
　もういいわよ。そういって友達は呆れて、また集団の中に戻って行ってしまった。

（何？　そんなに大騒ぎすること？
　今までもそういう話ならテレビでずっとやってるじゃない）
　いつもと違う様子のみんなに、私は少し戸惑った。
　が、すぐにみんな飽きてしまうだろう、と私は高をくくっていた。
　――しかし遂に、帰るときまでその話題は囁かれていた。

　ガシャンッ
　みんなの話についていけない自分に苛立ちを感じながら、家の玄関を乱暴に開ける。
　その音に驚いたのか、母がリビングのドアから顔を出してこちらを伺っている。

「どうしたの、帰って早々に。ドアは静かに開けなさい」

その日はなんだか疲れて、そのまま夕飯も食べずに寝てしまった。

1日目（後書き）

初めての連載です。
って言っても7話しかないんですけど（笑）
できれば続きを書いていこうと思いますのでよろしくお願いします！

2日目

「……き……咲っ、早く起きなさい！」

母親の少し慌てている声で目を覚ます。
寝惚け眼でベットの横に置いてある目覚し時計を確認すると……
——やばいっ！
時計の針は完全に学校に遅刻する時間を指差していた。

「どうして起こしてくれなかったのよ！」

急いで学校の用意をし終わった私は、母親がいるであろうリビングに向かって叫んびながら玄関まで走る。

「ちょっと、咲？　待ちなさい、話が「ごめん、帰ってきてから聞く」

そう言って玄関から飛び出す。
母が何を言おうとしたのかは気になるけど、今は時間がない。

学校の校門の前まで来て、私は違和感を感じた。
(いつも、この時間なら遅刻しそうで急いでる生徒がもっといるはずなんだけど)

明らかに周りを歩いている生徒の数が少ないのである。

今日はなにか特別な行事があったっけ？　などと考えている内に教室に辿り着く。
しかし、教室にいる人数もいつもの半数にも満たないほど少なかった。
何かあったのかと、教室の入り口付近にいた割と仲の良い男子に尋ねた。

「ねぇ、何かあったの？」
「あれだよ。隕石の話」
「えっ？　何か関係あるの？」
「昨日の夜テレビでさ、有名な専門家の先生だとかがこぞってこの隕石はこのままいけば地球
　にぶつかるって言っててさ」
「それで、みんなそんな時に学校行ってられるか！　っていないわけ？」
「そう。俺はまだ信じられないんだけどさ」

いつの間にか地球に危機が訪れていたらしい。
私はどこか人事のように思えた。
４６億年もずっと存在していた地球。
それがいきなり滅亡すると言われても、ぴんとこない。

「いつまでしゃべっているんですか。早く席に着いてください」

考えていると、いつ教室に入ってきたのか、先生が教壇に立っていつもの半数以下しかいない
生徒を席に着かせている。
そういえば、私は遅刻寸前だったはずだったのに、先生の方が遅かった……

「みんなはもう知っていると思いますが。今、噂になっている話の件で先生達は職員室で会議をしていました」

先生が遅れたのは会議の所為だったらしい。

「このクラスを含め、ほとんどのクラスで大多数の生徒が登校を拒否しているという事態が起きました。
そこで今日は、折角来てくれたみんなには悪いんだけど、学校はお休みになります」

突然の先生の嬉しい発言に、みんなは歓声を上げる。
元々、ここにいるのは噂を信じていない人か、知らなかった人だけだから素直に学校が休みな事に喜んでいるんだろう。
実際私も、早く家に帰ったら何をしようか考えている。
正直、まだ隕石の話は半信半疑だ。

結局、あの後すぐに帰れた私は、　外に出る気もなかったので、大人しく家に帰る事にした。
今日は家の玄関を静かに開けて入り、
リビングに入ると共に母が駆け寄ってきた。
「もう、咲ったらこんな時まで学校に行かなくてもいいでしょ。
学校は？　今日はもう終わりなの？」
今日はもう帰って良いんだって。そう答えると母は、

「だから朝に言おうとしたのに、あなた聞かないから。
昨日寝てたから知らないと思うけど、昨日の夜のテレビ番組のほとんどが隕石がぶつかるって話で持ちきりだったのよ？」
「その話ならもう聞いたよ」

家に帰って来てまでその話か、と少し嫌になる。

「とにかくその話はわかったから、もういいでしょ？」

でも、という声が聞こえたけど聞こえない振りをする。
正直なんでみんながこんな噂を信じるのかがわからない。
この日は、もう地球滅亡の話も隕石の話もする事はなかった。

2日目（後書き）

やっと、二部目です。

なんだか最後まで書けるか今から心配です……

3日目

（——つまんないなぁ）
今日は学校がない日なので昼頃までベットでごろごろしていた。
が、次第につまらなくなってのそのそと起き上がる。
「あなたいつまで寝てるつもり？　もうお昼になってるわよ」
遅めの朝食をとろうとダイニングに向かう途中で、すでに起きている母が言った。
「いいでしょ、学校は休みなんだから」
「あなたこんな時まで学校行く事考えてるの？」
まただ……。
どうせこの後、隕石がどーだの、こーだの言われるに違いないと私は早めに話を切り上げることにした。
「それより朝ご飯まだ残ってる？」
「もう残ってないわよ。何時だと思ってるの？」
朝ご飯はもうないらしい。
しょうがないので勝手にパンでも食べることにした。
しかし、切り上げたはずの話を母はまだ続けていた。
「咲、あなた本当にわかってないわね。
ニュース見てる？」

余計なお世話だ。
心の中でだけ反論する。
「とりあえず、テレビを少し見てみなさい。
あなた、おとといも昨日も夕ご飯食べたあとはすぐ寝ちゃったんだから」
「……わかった、後で見るから」

一応、返事を返す。
しかし母は、私の返事などすでに聞いてなく、
外国にでも逃げたほうがいいのかしら？　などとまた悠長な事を言っている。

（地球が滅亡するんだから、どこにいても同じでしょ）

だらだらとパンを食べ終えた私は、かなり億劫だが、母が言った通りにテレビの電源を付けてみた。
ニュースの番組にチャンネルを合わせると、意外に大事のようだ。
天体の専門家やら宇宙の事を研究している人達が、熱く議論している姿が映し出される。
正直何を言っているのかはわからなかったけれど。とにかく大事になっているのは、馬鹿な私にもわかる。
いままで全く信じていなかった話。
それが、大衆が視聴するテレビで放送されているのを見ると、友達に聞かされた話よりずっと真実味があって、少し戸惑いを感じてしまう。

「だから言ったでしょ？　今は大変な時なのよ」

いつの間にか私の後ろに立っていた母が言った。

「知らない」

私はなんだか悔しくて、テレビのチャンネルを変えようと、リモコンに手を伸ばした。

カチッ、カチッ、カチッ……

（……あれ？　なんなのよお）

おかしい。

どこの番組に合わせても砂嵐。

あるいはニュースしかやっていない。

「何これ、どうしちゃったの？」

「さあ？　でも昨日の夜も半分位の番組がやってなかったわ」

つまり、みんな仕事を放棄してしまったらしい。

（ちゃんと仕事しようよ）

しょうがない。灰色よりマシだろう、と画面を元のニュース番組に戻す。

こうして、やる事もない私は昼中ずっとテレビにかじりついていた。

ちょうどニュースキャスターが最近の犯罪の上昇率の話を始めた頃。

私はリビングのドアの方を振り向いて驚いた。

お父さんが帰ってきたのだ！
毎日朝早くに仕事に出かけて、夜遅くに帰ってくるので、滅多に合わせない顔がそこにあった。

「お、お父さん！　会社はどうしたの？」

今日はもう休みになった。そう小さく告げて、お父さんはすぐに自室に引っ込んでしまった。
後でお母さんに事情を聞いてみると、人手があまりにも少なくて、仕事にならないらしい。

ともあれ、この日は、久しぶりに家族３人が揃って夕ご飯を食べることが出来た。

3日目（後書き）

やっとこさ3話目です。
ほんとに最後までいけるんでしょうか？

4日目

朝から憂鬱だ。

今日は仕事がないお父さんは、朝からリビングで何日か前の新聞を読んだり、テレビで唯一放送しているニュース番組を見たりしている。

いつも家にいなくて無口なお父さんが少し苦手な私は、居心地が悪かった。

そして、近所でも元気な事で有名なお母さんが元気がないのも、私の気分を沈ませている原因だったりする。

……外にでも出るかな？

重苦しい空気に耐え切れなくなった私は、久しぶりに外に出掛ける事にした。

「ちょっと、外に出てくるね！」

お父さんの了解の唸りが聞こえた。

エレベーターで1階まで降り、セキュリティのかけられている正面玄関まで向かう。

「……あれ？」

いつもはロックのかかっているドアが、半開きのまま固まっている。

急いで管理人に伝えようと窓口まで向かうが、いつも居眠りばかりの管理人さんの椅子が、今日は空っぽだった。
しかも窓には「しばらく休みます」の文字。

ありえない。

いまだにあの話が信じられない私は、釈然としないままマンションから出る。

——町はいつもの活気を失っていた。

どのお店もシャッターが閉まり、まるでお客さんを呼んでいる気配はしない。
そもそも町を歩いてるお客さんが居ないのだ。

いつもは大混雑とまでいかないけれど、まあまあに混んでいる駅前の商店街にも誰も居ない。
居るのは何も知らないでゴミを漁っているカラスぐらいだ。

みんなどこに行っちゃったの？

さすがにここまでだと思わなかった私はうろたえる。

誰でもいいから声が聞きたくて、携帯で友達に電話をかけてみる。

ツーツーツー……

しかし、誰にも繋がらない。

携帯の向こうからは何も聞こえない。

「もう、いやだぁ……」

結局、何もしないまま家に戻った。

久しぶりの外で得たものといえば、みんな地球滅亡の話を信じてるって事と、携帯が繋がらないって事だけだ。

家の中は私が出たときとまったく同じ光景だった。
お父さんは変わらずリビングのソファにどっかり座ってるし、お母さんは力なくダイニングの椅子に腰掛けている。

「あ、おかえり咲」

私が部屋に入ってきたのに気付いたお母さんは俯いていた顔を上げた。

「うん。……ねぇ、夕ご飯は？　作らないの？」

壁の時計は、もうすぐ我が家の夕飯の時間を指そうとしていた。

「もうそんな時間？」

お母さんも時計を確認して驚くと、立ち上がりキッチンに向かう。

いつもより少し味気ない夕飯を食べ終える。
なんでも、お店が開いてなくて買い物ができなかったらしい。

それでもお腹に食物を詰めて安心した私はソファに寝そべりながら
一局しかやっていないテレビを横目で眺める。
両親はもう寝室に引っ込んでしまった。
その内、眠気に襲われた私は、そのまま眠ってしまった。
テレビのアナウンサーの声が耳にいつまでも響いた。

「最近、自殺者が増加している様子で――……」

４日目（後書き）

やっと、４日目。
久しぶりに更新しましたｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9738d/

地球滅亡までの7日間

2010年11月24日07時00分発行